

徳畑川〈とくばたがわ〉の大洪水〈こうずい〉（青垣町）

毎日、毎日、雨がふり続き、止みそうにありません。

ところどころに山くずれがおきて、谷川の水もどんとどんとふえてきました。

谷川の土手をこえ、濁流〈だくりゅう〉は田畑をひたしていつて、ここ遠阪〈とうざか〉村は一面の泥〈どろ〉海になりました。

大雨は止みそうもなく、水かさはますますばかりです。

「えらいことじゃ、たたみが流されるわい、かえてもかえても水がでるのう。」

「ほんまに、どうなることやら、雨はやまんかのう。」

八右衛門さんの家は谷川近くにありますので、泥水は家の中へ流れこんできます。

戸をたてなおすやら、水をかえ出すやら大騒動〈さうどう〉がつづいています。

ふと、暮れかかる雨空を見ようと表に出ました。

八右衛門さんは、ほっと一息をついて土手にあがりました。

赤土の濁流の中に、材木やいろいろなものが流〈なが〉れていきます。

川から何かものすごい怪物〈かいぶつ〉が目にはいりました。

「わあっ。」

「わっ、あれ、あれを見てみ。」

「えっ。」

「大蛇〈じゃ〉じゃ。」

ふるえる彼の指〈さ〉す方に、胴まわり七〜八十センチメートル、色は黒く、大人の頭ほどもあろうと思われる鎌首〈かまくび〉をもたげながら、岸へたどりつこうと泳いでいます。

近所の人々もいっしょにみえています。

「大蛇じゃ。」

「みみずじゃ、大みみずじゃ。」

「どてらいみみずじゃ。」

声をのんで見つめるうちに、その怪物はおしながされて、とうとう姿をけしてしまいました。

みんなほっと胸をなでおろしました。

元禄十五年（約二百七十年前）の八月の大洪水〈こうずい〉の日の夕方のごとでした。

この日また、谷川橋に一匹の大みみずがかかっているのを勘兵衛さんらが見つけています。

大みみずの長さは六〜七メートルもあって、からだは青くひかっていたんですが、だんだんと水がふえてながされていったということです。

織田家日記に、「大風雨後〈だいふううご〉、山崩出〈やまくずれいで〉、大みみず二頭〈にとう〉、人為奇物也〈ひとためにきぶつなり〉。」と書かれています。

